【研究機関紹介】

イエンシェピン老年学研究所

イェット・スンドストレーム
訳と解説：三　上　芙美子

スウェーデンのイエンシェピン(Jönköping)にある老年学研究所（Institutet för Gerontologi）は，1970年に民間のイニシャティブによって設立され，イエンシェピン県の一部門になっている。またこの地域（イエンシェピン市）の自治体とも協力関係をもっている。

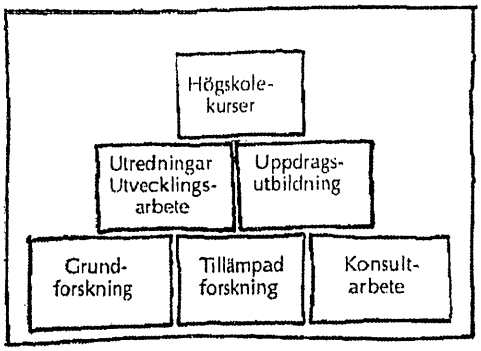
当研究所のユニークな点は，調査研究と教育のプログラムを連結させていることにある。後者は，学生（といっても看護婦（士）やホームヘルプ行政担当者であることが多い）や老人福祉の分野で働くその他の人々に開放されている。そこでは，4つの異なる短期コースと2つの長期プログラムがさまざまな期間に提供され，老年や痴呆老人を含む老人の福祉に関する主要な分野をカバーするようになっている（各コースは学業単位を与える)。

近年においては，痴呆老人の診断学やケアに関するノウハウに，特別の関心が寄せられている。この領域で老年学研究所は，相当の実力を認められている。6名の研究員（うち5名が心理学者，1名が社会学者）の関心は，理論的，基礎的研究（たとえば高齢者の記憶機能や知力の研究）および直接的，実用的な関係項目の調査（たとえば施設への転居，痴呆老人のグループ居住，ホームヘルプ・サービスの受け手と担い手に関する調査）の両方に集まっている。

年間予算は250万スウェーデン・クローナ（約6千万円）で，このうち3分の1は外部からの資金で賄われている――ここは，低コストの研究センターなのである。スウェーデン政府諸機関および地方自治体との連絡や協議は，公式にも非公式にも広く行われている。また海外からのゲストも絶えず迎えており，国際的な協力も行っている。研究所が将来，国際セミナーのために特定の資金をもつことを願うばかりである。

最近の研究例としては，高齢双生児の痴呆症に関するスウェーデン－アメリカ共同研究プロジェクト（アメリカ国立老年学研究所によって資金援助されている）がある。ちなみにスウェーデンは，全ての双生児の完全な登録簿をもっている。このほか，高齢者の間の免疫学的機能（これも高齢双生児研究と共同でアメリカの助成による）についてや，ケアのパターンに関する国際比較（スウェーデン－イスラエル，および北欧諸国間の比較）などの研究が行われている。

スウェーデンほど，今までのところ独り暮し世帯の割合が高く，高齢者への公的サポートが広範に行われているところは，他にあまり見当たらない。なかでも高齢女性の境遇には，特別の関心が寄せられている。他に進行中（1990年



老年学研究所の紹介パンフレット

現在）の研究調査プロジェクトには，公的サービスの多様化に関する研究や，後期高齢者の長期追跡調査（longitudinal studies）がある。後者は OCTO-Study と呼ばれるもので，1987年および1989年に84－94歳の高齢者を面接調査したもので，1991年に再度調査することになっており，以降も続く計画である。この大規模な調査では，援助のニーズ，サポートの種類，痴呆や記憶に関する体力および知力のテストなどがうまく網羅されている。

老年学研究所の有意義性は，スウェーデンの大学がこれまで老年学の諸問題にほとんど関心を示してこなかったという事実をみれば，一層明らかとなる。たとえ，3つの新しい教授職（ストックホルム，イエテボリ，ウプサラに各1名の新しい教授）がエイジングのさまざまな局面をそれぞれ担当すべく，1991～1992年に設置される，という変化の兆しはあるにしても，である。

解説

1990年秋，訳者は社会保障研究所の国際交流事業の一環としてスウェーデンを訪れ，イエンシェピンの老年学研究所では客員研究員として研究交流を深める機会に恵まれた。そこで，3週間という短い滞在ではあったが，研究交流を通して得た印象から，老年学研究所について若干の解説を加えておきたい。

イエンシェピンは，スウェーデンの中南部，美しい湖ヴェッテルン（Vättern）の南端に位置する人口約11万の都市で，イエンシェピン県の県庁所在地をなしている。中心街を少しはずれると森におおわれた丘陵地帯で，住宅街も緑の中に点在し，実に空気の良い静かな町である。老年学研究所（Institutet för Gerontologi）は中心街に近いビルの1階にオフィスがあり，スタッフ数および財政力からして小規模ではあるが，その研究・教育活動の水準の高さと研究調査のネットワーキングの力強さから，ここがスウェーデンにおける老年学研究の中心地であることを納得させられる。

研究所の1日は，朝8時半ころに始まり夕方5時には全員帰宅する。午前（10時ころ）と午後（3時ころ）の2回，必ずコーヒータイムがあり，所長も研究員も秘書も仕事の手を休めてティールームに集まり，テーブルを囲んでコーヒーを飲みながら雑談を楽しむ。このひとときが，実は所員の間の大切な情報交換や意見交換の場となっているのである。研究員のなかには，忙しくてコーヒー片手に資料を読みながら，雑談には半分だけ耳を傾けていたりする者もいる。それでもここに集まって皆で顔を合わせることが，大切なコミュニケーションにつながるわけである。

研究員の人事はかなり弾力的で，研究班ごとに臨時の研究員を配置したり，フルタイムでも本人の希望により期限付きで（たとえば2年間とか）研究員として勤め，そのあと他の職場に移るケースもある。また海外との研究交流にも積極的である。各研究プロジェクトの成果は，研究所の報告書シリーズとして，またスウェーデン国内の専門誌や国際的なジャーナルに掲載されるが，近年では大半の論文が英語で書かれるようになってきた。キャリアを積んだ研究員のなかには，学位論文を研究所発行の単行本として出版した者もいる。

現在進行中の研究プロジェクトのうち，著者も紹

介しているOCTO－Studyという追跡調査は，とくに注目される。高齢者の健康状況やADLのほかに社会的経済的状況が訪問看護婦によって面接調査されている。OCTO－Studyのほかにも，Täby市の調査やJönköping市の調査も行っている。いずれの調査も，介助が必要な場合に家族，友人，その他（ホームヘルパー等）から容易に得られるかどうか，といった高齢者のサポート・ネットワークに関心が寄せられている。地域におけるサポート・ネットワーキングの重要性は，日本においても認識されつつあり，これらの調査は参考となるであろう。

イエンシェピンの老年学研究所が現在かかえている悩みは，オフィスのスペースが狭いことと，図書資料室が充分に整備されていないことである。しかし内外における研究のネットワークは広く，研究所の存在価値は，高齢化社会においてますます高まるであろうことに疑いの余地はない。

(Gerdt Sundström

イエンシェピン老年学研究所教授)

（みかみ・ふみこ　社会保障研究所主任研究員）